



ISS Comparative Regionalism Project

C R E P

<http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/crep>

東アジアを語ること、その問題と可能性

CREP Seminar 19

孫 歌

2007年4月24日

これは2007年4月24日のセミナーの口述記録を要約整理したものであり、

転載・引用等の利用は出来ません

CREP 地域主義比較プロジェクト

第17回月例公開セミナー

2007. 4. 24

孫 歌氏（中国社会科学院文学研究所研究員）

「東アジアを語ること、その問題点と可能性」

中村 司会を担当いたします東京大学社会学部の中村です。地域主義比較プロジェクトのリーダーを務めております。本日は孫歌先生をお迎えして、月例セミナーを開きたいと思っております。よろしくお願いいたします。

私が孫歌先生を直接存じ上げるようになったのは今年に入ってからですが、実は書物を通じてそれより少し前にお名前を知ることになりました。それは『ポスト〈東アジア〉』という知の攻略というシリーズの本で、思想読本の中に入った座談会です。東アジアという概念をまずは歴史的に相対化して疑ってみる可能性がある、ということ等をそこで主張されており随分と勉強になりました。

その後、今年の3月に退官されました平石直昭先生が孫歌先生を社会科学研究所に客員としてお招きになりました。そこでこの機会を捕まえて、孫歌先生に是非「東アジアを語ること、その問題点と可能性」というテーマでお話いただくことにしたいと思いき快諾いただきました。それが今日のこの会というわけであります。

進行といたしましては、大体1時間程度先生に語っていただき、その後自由に質疑応答をしたいと思います。先生、よろしくお願いいたします。

孫 皆さん、こんにちは。まずこの場をお借りして、社研の皆さんに心からお礼を申し上げます。今回はすばらしい研究条件を与えられ、よい勉強ができて、いろいろな収穫がありました。今日ご報告をさせていただくものは、その一部になります。

早速今日の話に入ります。先ほどご紹介に預けたこの本自体は、実は私が計画したものではなく、作品社の編集者から「孫歌さんこういう本を作りましょう」と相談されたものでした。しかし、私は東アジアというカテゴリーは今の語り方ではおそらく成立できないのではないかという疑いをずっと持っていたので、それを自分なりに解決しないままこの本を作るのは誠実ではないと実のところ思っていました。しかし、この地域で東アジアを

語るということがまだ重い問題となっているなかで、私はそこから逃げたくなかったこともあって断ることもできませんでした。そのため、「私が編集すると、やや中国中心になってしまうように見えるかもしれませんので、韓国や台湾の方も一緒に協力してやりましょう」と提案し、その結果こういう形になりました。

『ポスト〈東アジア〉』という題名についてですが、私は個人的にポストという言葉があまり好きではなかった。そして、東アジアというカテゴリー自体がまだ出来ていない段階で、もうポストを語りだすのは早過ぎるのではないかと思いました。しかし、元々ポストのシリーズの本になっていると編集者から言われたため、タイトルについて不本意に思いながら編集しました。なので、私が書いた解説の中ではポストという言葉をも自分なりに崩そうとしました。以上この本についてのご紹介です。

今日この場で東アジアを語るにおいて、私にはまず思想史研究者としてのスタンスを限定する必要があるかもしれません。思想史の立場から東アジアという問題を考える場合、思想史のあり方についても考えなければなりません。思想史のあり方についてはいろいろな語り方で語られてきたので、ここで展開する必要がないと思いますけれども、私個人の考えでは、思想史はある観念的な歴史を作りながら、あえて状況性を持たなければならないというような一種のパラドックスを持った分野だと理解しています。

状況性が含まれている以上、思想史研究は概念に頼りながらも概念のカラを破らなければならないというパラドックスに直面しているわけです。ですから、その概念を使う意味で、概念の相対的な独立性を尊重しながら、それを破る形で概念を歴史化するというプロセスは、思想史研究のひとつのプロセスだと私は思います。そして、そのプロセスによって私のイメージしている東アジアというカテゴリーをまず考えたいと思います。

一方、東アジアというカテゴリーを課題として成立させるためには、少なくとも二つの条件を満たさなければならないと私は考えています。第一に、東アジアというカテゴリーは相対的に独立性を持たなければなりません。つまり、独立して存在できなければ、カテゴリーとしては有効性を持たないのです。仮にこの東アジアというカテゴリーが独立するような形で成立したとしても、他のカテゴリーがこれに取って代わるという可能性も相対的に排除しなければならないのです。つまり、他のカテゴリーによって取って代わられる場合、東アジアというカテゴリーは存在するという必要性を失ってしまうのです。したがって、このカテゴリーがどうしても必要だと思って初めて、それは成立するわけです。現実の中で議論されてきた東アジアというカテゴリーは、この二つの条件をそれほど十分に

満たしていないのではないかというのが私の考えです。たとえば、東アジア研究自体は、東アジアという領域の中での国際関係研究として扱うことは可能だと思います。

また、日本、韓国あるいは朝鮮半島、中国、台湾といういくつかの国と地域の間で出来上がったこの連合体は、国単位の傾向が非常に強いため、まず国単位の研究をして、それに基づいて交流を図るという形になるわけです。そうすると、東アジアという物理的な範囲はどのような独自性をもっているかという問題が出てきます。今急いで東アジアとは何かという問題を出す前に、まず議論の前提を一緒に考えなければならないと思います。

レジュメのなかで、議論の前提として三つの問題を設定しました。まず、「東アジアは、どの地域を指しているか」ということです。今常識化している東アジアというのは、基本的に日本、韓国、北朝鮮、中国大陆、台湾という地域を指しています。このような共通認識に基づき一つの地域がまとめられています。

しかし、それと同時に他の発想法もあります。それは、既に崩壊したソビエト連邦です。ずっと主張され続けていた東アジアについての考え方で、そこには全く違うイメージが含まれています。というのも、その構図には今日のロシアである旧ソ連とモンゴル共和国という私たちの視野から全く欠落し、交流もなかなか難しいような地域が含まれているからです。それから、中国、朝鮮半島、日本、ベトナムも含まれています。この地域を加えるためには視座の調整あるいは調節が必要になります。

つまり、ただの地域の拡大ではなく、認識パターンもそれなりに変化するのです。ソビエトの十月社会主義革命が影響を及ぼした地域として東アジアはまとめられたわけですので、それを見る視座も当然違うわけです。

さらに、それと関連して二つ目の問題を考えたい。東アジアは抽象的に語れるものではなく、歴史の文脈の中で位置づけられて初めて語れる歴史的な対象です。ですから、いまわれわれは、いろいろな場でいろいろな形で語られてきた東アジア像を見る時に、その歴史のどの段階やどの文脈で語られているのかという、相対的に位置づけをすることが必要なわけです。

例えば、儒教文化圏という東アジア像があります。特に韓国では、それについて非常に強く語られています。その中でいちばん面白い説は、ソウル大学のある歴史学の教授が提出した説です。彼によれば、儒教文化圏の中心である中国が儒教の原理を発明し、どんどん周辺に広げていったが、そのプロセスの中で儒教が最も栄えたのは周辺国においてであり、中心国は発明した権利を持ちながら実はそれを失ってしまったというのです。

また、近代になって西洋から学び西洋に対抗するという見方もあります。そして、この西洋に学び西洋に対抗する地域共同体という東アジア像も、実はかなり短い歴史的時期にしか意味を持ちません。その次に出てきたのは、大東亜共栄圏という東アジア像です。これは痛ましい歴史の記憶を伴う非常に不幸な東アジア像ですが、歴史の事実として東アジア像から除外してはいけないと思います。その後、社会主義革命の地域、そして冷戦期の国際政治関係の変動の場としての東アジア像もありました。

このように、どの段階においても表現のスタイルや現れたスタイルは違いますけれども、歴史の文脈はこういう変動の中で見えてくるわけです。このように歴史の文脈の中で東アジアを位置づけながら、この地域の独立性は一体どういうものかを考えると、おそらく明快な回答がなかなか出にくいのかもかもしれません。

三番目は、東アジアを議論する前提として非常に重要な問題だと思いますが、東アジアは常に開かれなければならない地域になってしまうこと。つまり、自足できるような地域ではないということです。例えば、今日において最も顕著な象徴は六カ国協議です。東アジアの歴史的な事件として、なぜアメリカは参加しなければならないか。これは、戦後まもなくスタートした東アジアの構成の重要な側面がこういう形で現れているのです。ですから、私たちは東アジアを語る時にアメリカをはずしてはいけないという歴史的な事実と直面しているのです。そして、そのアメリカはただ一方的に入ってきたわけではなくて、東アジア地域の国際的な力関係によって内在化し、東アジアの中で政治的な力関係の一部になる・ならせるといような努力は、むしろ東アジアという地域が自ら辿ったプロセスでもあります。

そういう意味において、東アジアの歴史を論じるときに、的確な表現はなかなか難しい。例えば、日本の批判的知識人たちが日本の戦争責任をとろうとする時、例えば朝鮮半島に対する侵略行為についての謝罪の仕方と、歴史を反省する時の反省の仕方自体に、やや日本を過大評価する傾向（つまり日本の戦後の在り方の複雑性を無視する傾向）がないわけではありません。

しかし、これは非常に微妙なことなんです。誤解されないような適切な表現の仕方を私はまだ見つけていません。つまり、日本の侵略戦争に対する批判は絶対に必要で責任を追究することは必要だけれども、その追求と戦後日本の歴史と切り離しては、過去の侵略の歴史に対する今日の日本が取るべき責任のあり方は正しく語れない面があります。つまり、戦後になってアメリカの介入と日本がアメリカの介入を自ら利用したということの往復運

動があります。この往復運動への眼差しが欠落すれば、歴史像は単純化されてしまいます。日本の戦争責任は、おそらくこの往復運動を無視しては追求できません。戦争は1945年で終わったわけではないからです。朝鮮戦争の中で、日本の「侵略」はどう位置づけるべきか、それと1945年までの侵略や植民地行為の関係をどう理解すべきなのか。その場合、やはり東アジアというカテゴリーの中でもっと正しくこの歴史を把握すべきだという緊迫な課題を私は強く意識しています。

早速レジュメの第二の問題に入りたいと思います。先ほどご紹介した、私の考えている三つの議論の前提、いずれもやや疑問になる前提ですが、この前提の下で東アジアをどう語るか。語る時に一体どういう困難に直面するのか、という話をさせていただきます。

私たちが今日考えている東アジアの問題は、おそらく戦後の冷戦からスタートし戦後の歴史とつながっていると思います。しかし、これまでの二回の世界大戦までの歴史だけを語り今日のアジア論に繋げることは、やや困難になると思います。また、戦後を語る時にスムーズに語れるかという、そうではありません。そこで先ず一つの問題は、戦後の冷戦問題ですが、これは後でお話しますのでここではとりあえず触れませんが、その冷戦の歴史自体はかなり複雑な形で流れてきたわけで、決して私たちが今イメージしている東西対立だけでは片付けられない歴史であるということです。

そのなかで最も顕著な問題は、東アジアという地域を国単位で語りきれないということです。例えば、今東アジア三国というイメージが出来上がり、その中で日本は沖縄が問題になっているという部分があるにせよ、国民国家としてまとまることは困難ではないように見えます。しかし、おそらく韓国は朝鮮戦争以前の歴史を切っては語れないような複雑な局面に直面しています。中国の場合、大陸と台湾、ただ統一するか独立するかという単純な問題ではなく、近代以降の歴史を片方において欠落した形では語れないという難しい局面があります。むしろ、台湾を考える場合にもかなり大きな位置づけになっているとさえ私は思います。

つまり、この地域を一つのカテゴリーとしてどう語れるかという、非常に困難な問題があるわけです。国単位・国民国家では片付けられない困難さからうまく表現できない、必ずどこかでぶつかるような問題があるのです。例えば、韓国の高句麗問題や台湾における大陸との緊張関係があります。日本の場合、植民地の問題と植民地以前の様々な歴史的交渉の問題があります。大陸の場合はもっと複雑になると思います。

そして、東アジアを語る時にどうしても内在化されたアメリカを無視するようになりま

す。しかし、アメリカがこの地域で実際に果たしている役割は、おそらく私たちの想像以上に大きいと思います。しかし、アメリカを内在化しながら作られている東アジア像は、地域的に持続できないだけでなく、おそらく国単位の組合せとしても構成しにくいようなカテゴリーとなります。これが第一の困難です。

そして、第二の問題は冷戦構造そのものについての認識です。私たちは、冷戦という言葉を受け入れる時に、それがスタートした段階のイメージままで受け入れる傾向があります。冷戦という言葉は、1947年4月にアメリカの国際連合原子力委員会のアメリカ側代表のバーナード・バルクがアメリカで講演をした時に最初に使ったと言われていますが、いまの通用している「常識」では、冷戦というのは冷たい戦争ということで、イギリスのチャーチル首相の「鉄のカーテン」に併せて、米ソをはじめとした两大陣営の対立を宣言したものです。その後は、このイメージは两大陣営に共有されるかどうかはともかくとして1990年まで続き、そのあとは冷戦崩壊というイメージに切り替えられました。崩壊したのは東側と西側の陣営の対立であり、ベルリンの壁やソビエトの崩壊自体がその象徴になるわけです。

しかし、実際に調べてみると歴史の実像は決してそのような明快なものではないということがよくわかります。平石先生からこのような雑誌を頂いたことに非常に感謝していますが、これは1971年にモスクワで創刊された『極東の諸問題』という雑誌です。この雑誌を出したのは、ソビエトの科学アカデミー極東研究所というところですが、このソビエト科学アカデミーは、今私が所属している中国社会科学院のようなところですが、ちなみに、中国社会科学院はこのソビエト科学アカデミーの真似をして作られた機関です。この雑誌は、創刊号は見つかっていないからわからないのですが、実に三ヶ国語でモスクワから翻訳・発行され、おそらく大使館を通して各大学にそのまま寄付されたと思います。その三ヶ国語とは、ロシア語、日本語、英語で1980年になってスペイン語も加えられました。この『極東の諸問題』とは日本語の題名ですが、ロシア語原文もそのままになっています。実際に読むと、この中ではソビエトのイメージしている東アジアを扱っています。その地域は先にご紹介した、議論の第一の前提である二種類目の地域を指しています。もちろん、ソビエト、モンゴル、中国、朝鮮半島、日本、ベトナムという地域の中心になっているのはソビエトで、ソビエトの囲みによってこの地域は一体化されたとされています。

この雑誌を読むのは、楽しいことではありませんでした。非常に硬い政治的イデオロギーに基づき書かれていて、学術雑誌としてはなかなか読めませんでした。しかし、その中

で非常に面白いメッセージが含まれています。まず、この雑誌の半分以上はアメリカ批判ではなく中国批判になっています。ご存じのように、中ソ論戦を経てさらに国境での戦争は69年に終わりましたが、70年代はこの二つの社会主義国間の緊張関係が高まった時期でした。同じ時期に、ソビエトは西ドイツと国交を回復して、西ドイツが東ヨーロッパでの謝罪を進展させる条件を作り上げていました。

それと同時に、中国もアメリカと接触し、72年に上海で中米宣言を発表しました。実際にアメリカと正式的に外交関係を結んだのは79年ですが、東側の社会主義陣営によるそれぞれ西側との連動は、70年代において非常に顕著だったのです。

この歴史段階から遡って、中ソ紛争が激しくなった60年代前半の国際関係を見ると、西側と東側の陣営はきれいな対立というより、複雑な状況の中であって対立していました。さらに遡って戦後直後の日本の総合雑誌を読むと、その当時冷戦という言葉が使われながら両大陣営の類似点を語るという言説がかなり多くありました。だから、この歴史の実像は一体何なのかという疑問が私には常にあるわけです。つまり、私たちが持っている安定した東対西という発想法自体が、歴史の実像としての冷戦構造の中ではいかにも貧弱のようなものです。ですから、冷戦というキーワードによって見えてくる歴史像自体は、かなり混沌たるものになってしまいます。

以上の分析を踏まえて、中国、朝鮮半島、日本だけに集中して今日の東アジア像を考えると、決して意味がないとは私は考えていませんが、非常に限られたものになってしまうという結論が出せるでしょう。

以上、東アジアを語る時の困難さをもっぱら強調しました。しかし、私は東アジアを語ることで自体の生産性をずっと求めてきたわけで、これからも求めていきたいと思います。ここで、冒頭に触れたような、東アジアを一つのカテゴリーとして独立させるためには二つの条件がいるという発想から、東アジアを語ることの可能性について三点ほど話をさせていただきます。

まず、もし歴史を直視する場として東アジアを定義すれば、少なくとも二つの問題は避けられないでしょう。一つは、国単位で避け続けられてきた問題を直視すること、もう一つは歴史の変動を直視することです。この二点を満たす地域は、やはり東アジア以外にないかもしれません。ですから、そういう装置として東アジアというカテゴリーを練りあげましょうと私は提案したいのです。

具体的な問題として、私はここで三つを取り上げたいと思います。一番目は東京裁判、

二番目は朝鮮戦争、三番目は台湾問題です。いずれの問題も一国単位で片付けられない問題です。特に、研究者としてこの問題を歴史的に分析しようとする場合、特定の国に自分の発想あるいは視座を置いて見ることはほぼ不可能なことです。この本を編集した時に、私は東アジアで東京裁判について書ける書き手を、日本人をも含めて探し続けましたが、承諾した人はやはり書けないと結局断ってきたため、東アジアでは見つかりませんでした。歴史的な事件を偏らない書き方で扱うことができるようになるためにも、東アジアという装置がおそらく必要だろうと思いますが、われわれの馴染んできた「国」という発想から出ないといけません。

朝鮮戦争と台湾問題も同様です。いずれについてその内部の複雑性を扱うためには、一国単位の発想法から自由にならなければなりません。そして、国民国家を否定するような抽象的な国際主義の立場は、この場合にはかえって役に立たないという微妙で逆説的な現実もあります。

そして最後の問題は、私は答えがなかなかうまく出せない問題ですが、国際関係という領域においての良質な研究だったら、東アジアという装置をうまく生かせるのではないかということです。そういう可能性があるはずですが、ただし、国際関係が国と国の間という意味で作られた研究分野であるのに対し、東アジアはそうではありません。先ほどご紹介したように、この地域の中の国単位で片付けられない問題こそが基本的な問題になっているわけです。これはどの地域の中でも一番難しい問題だと思います。

東アジアが国際関係というカテゴリーからはみ出してしまうということは、一つの事実としておそらく成り立つだろうと私は初步的に判断しています。しかし、この国際関係の視座との相違点をいかにうまく確定できるかという問題については、私の考えは未熟なままです。とりあえず、お話はここまでにさせていただきます。どうもありがとうございました。

中村 どうもありがとうございました。それでは、いろいろな視点から議論ができると思いますけれども、いかがでしょうか。

質問 1 大変興味深くお聞きしました。僕がお話をお聞きして持っていたいばん単純な疑問は、孫歌さんのおっしゃっている東アジアという概念と、日本において大東亜共栄圏という言葉が意味していた地域がちょっと違うのではないかという点です。もう少し簡単にいうと、今日本でおそらくイメージされている東アジアは、孫歌さんも最初に書かれたよう

に、日本、朝鮮、中国大陸・台湾の辺りではないかと思います。しかし、大東亜共栄圏とは英語で **Great East Asia** で、**Great** つまり「大」がついているように東南アジア辺りまで入るわけです。そして、日本がアメリカあるいはイギリスと戦争をやっていく際に、石油や錫などの必要な物資を確保するために東南アジアの資源が必要だったという軍事的あるいは経済的な観点があったため、東南アジアまでを取り込んだ共栄圏という言葉になったと思います。

それに対し、近代の初め頃の日本では、アジアというより東洋とっていました。その場合、韓国や中国が主に念頭にあり、それは今日孫歌さんが言われたように、やはりヨーロッパ列強に対しどういうふうに分ち守るかという発想の中から出てきているわけです。ですから、東洋とアジアはやはり違っていて、東アジアというのはその両方がミックスした形になっているわけです。

何を言いたいかというと、やはり概念や言葉というのは、一定の問題を把握してその問題に答えようとする中で作られるわけで、そういう意味では東アジアという言葉は現在我々が使うときの前提として、どういう問題の認識および把握があるべきなのかということと、それから東アジアに関連するようないろいろな意味や言葉、東洋とか大東亜共栄圏とか東亜共同体とかいろいろありますけれども、それぞれの言葉がどういう問題に対応しどう答えようとして作られたのかということ、思想史的に見た上で現在の東アジアという言葉は我々が使うことの意味というか、今日おっしゃったように、他の言葉によって代替出来ない言葉としての独立性がどこにあるのか、というように歴史的に追いかけて分析していくと良いのではないかと思います。そういうふうにと考えると、大東亜共栄圏と東アジアについて重なっているような捉え方をされたのには、私は少し違和感を持ちました。

孫 とても興味深いご指摘です。東アジアという地域は、おっしゃった通り東南アジアと北東アジアを含めた地域です。しかし、例えばこの雑誌の中でも東アジアという言葉の使い方は、時々北東アジアを指している。または、時々東南アジアを含めた一つの全体として使うこともある。つまり、境界がかなり曖昧で使い方によって対象が変わってくる、今現在の段階ではまだ出来上がっていないようなカテゴリーであるというのが一つの問題です。

もう一つの問題は、例えば儒教文化圏や西洋に対抗する地域共同体という意味で用いる東アジアという言葉については、私も含めてあまり違和感がないですが、いきなり大東亜共栄圏を入れたら確かに違和感があります。しかし、東アジアを語る時に、このことを避

けてはいけないと思います。ただし、これは一種の鬼子のようなもので、今の中国の知の社会でこれを歴史的に受け入れるような土壌ができていないため、猛烈に反発されてしまいます。

しかし、大東亜共栄圏は最初からイデオロギーあるいは侵略の口実だったわけではありません。最初は思想として出されて、その後変質されてしまった。そのような歴史的な経緯もありまして、どのようにこの歴史の痛ましい教訓をこの地域で共有できるか、つまり日本はこれから同じことをやるのかやらないのか、という位相でこの問題を終わらせるのではなく、なぜ地域的に考える場合に戦争を起こして資源を奪うという方向にいつてしまうのかという問題は、どの国でも直面しなければならないことです。

そういう意味で、日本のこの痛ましい歴史の記憶をただ負の遺産にしてしまうだけでなく、歴史の分析対象にもしたいと私は考えています。ただ、先生がご指摘された問題自体も確かに存在しています。つまり、儒教文化圏や地域共同体や社会主義の地域が、地域的な現象あるいは歴史の段階として存在していることに対して、大東亜共栄圏は日本だけの主張でした。そういう意味でアジア性を持たない。偽物とは言えませんが、一種の擬似アジア論のような性質は確かにご指摘の通りあると思います。ですから、ここでは異質なものであるとして取り入れられたわけです。でも、ご指摘を受けるまで、私はこの問題についてあまり意識していませんでした。つまり、いくつかの国と地域を連動させ、戦争という暴力手段をいかにして防止できるかという問題を含めて考える場合、大東亜共栄圏を入れるべきだということ考えていたのですが、カテゴリーとしてはおそらく位相の差という問題が存在しています。今後、どのような形がいちばん良いのかを考えていきたいと思いません。

もう一点あえて加えたいことは、東アジアというカテゴリーの成立は、今日においては、大東亜共栄圏の目的とは違いますが、おそらく地域経済的な要求から出てきた願望だと思います。そういう意味において、戦争という暴力には繋がらないように努力することは重要だと思います。例えば、日中共同開発という形で資源の共有を達成し、昔の大東亜共栄圏というような形に成らせないという努力は、今日においての私たちの政治課題ですね。

質問2 今の質問に関連しますが、大東亜戦争が始まった時に私は小学校一年生でしたので、非常によく記憶しております。先ほどのご質問のなかの話で気がついたのですが、今日の東アジアにあたる言葉は当時の言葉で言うと「東亜」だったのです。大東亜ではなく「東亜」です。東亜というと、日、満、支なのです。朝鮮は日本の一部だから入れなくて、

日本と満州国と支那、当時の支那、王政政権です。それを東亜と呼んでいたと思います。

大東亜と言いだしたのは、おそらく大東亜戦争が始まってからのことだと思います。東亜より範囲が広がったため、東南アジアを含めて大東亜といい、その大東亜ということになると、例えば大東亜なんとか会議とか、大東亜文学者会議とかいうふうになり、王政政治も含んだ大きな地域としての名前で大東亜と確か言っていました。今の東アジアにあたるような範囲は、その前の東亜という言葉でやはり表現していたので、当時は言葉を「東亜」と「大東亜」で分けていたと思います。

中村 前提問題について他に議論があればどうぞ。司会の立場で申し訳ないのですが、例えば2000年代に入って、East Asian SummitなどとEast Asiaと英語で言っていますが、ASEANの十カ国と日中韓という三カ国、それにインド、オーストラリア、ニュージーランドまで含めたメンバーでEast Asian Summitを開いたわけです。彼らが言っているEast Asiaというのは、先生の議論からすると都合だけで作ったものということになるのでしょうか。

孫 これはかなり難しい問題です。そこで作り出したのはおそらく間違いないです。問題は、作り出された後どのように変わっていくかです。このASEANプラス3という構図自体は、どちらかといえばASEANの十カ国から出された提案です。今年の一月に私が北京でのある集いで議論した時、この問題についてある発表者が触れていました。彼はやや大国主義的な言い方で、あの十カ国は全部小国、まとめて全部オランダくらいのものですから、アジアを決めることにはならないと言っていました。決めるのはロシア、中国、インドの三国で、彼は日本をカットしていました。

つまり、歴史の局面におけるいろいろな都合によって言葉が作り出され、ある範囲で流通します。問題は、流通してからどういう結果が持ち出されるかということです。最初の都合で言えば、ASEANはおそらく中心になり、後の三カ国は加えられるということになります。しかし、言葉が流通してしまうと、なぜ三ヶ国は一つの共同体になれず、ばらばらに加えられなくてはいけないのかというように話が変わり、その結果共同体を作ろうということになったのだと思います。変わらないと、今度は誰を中心にして作るかという話に切り替えられ、結局ASEAN自体がなくなってしまったのです。

今のご質問に戻りますと、私は言葉をあまり信用しないという持論を持っています。カテゴリーは、やはり具体的な都合があって作り出されたわけで、その後私たちがこのカテゴリーを使う場合に、その都合とある形で切り離しながらもその都合を失わないというプ

ロセスでこのカテゴリーを使わなければなりません。そういう意味で、このASEANプラス3という提案自体は、おそらく新しい思想の展開として非常に重要だと思います。

質問3 非常に面白い発表をしていただき、ありがとうございます。これまで大国が東亜や大東亜を提案してきたため、東アジアという言葉に反発を持っている日本人が結構多いと思います。例えば、アマゾンにいくと東アジアという幻想を信頼できないとか、そういう本がいっぱいありますね。そうすると、こういう地域的な概念を大きな国が利用して自分の権力を拡大するのではないかと、という懐疑的な見方も多いようです。

しかし他方では、具体的なアジア金融危機以来の発展を見ると、アジアが具体的に発展し、ある時期では韓国の金大中も結構積極的に推進したことです。逆になってしまった。小国はそれを推進し、中国と日本はどちらかというと保留的な態度をとってきました。それが最近は少し変わってきているのではないかと思います。少なくとも最近十年間は、アジアを中心に他の国がどのように対応するかという問題になってしまいました。

半年くらい前に公表された調査のなかで、非常に面白い結果がありました。どの国で東アジアという概念がいちばん支持されていたかについて、小国は支持し、大国の国民はどちらかという懐疑的であるというものでした。たぶん米朝と国の部分は自分の国でもやれるから、あまり地域を使う制約を受ける必要がないのではないかと、という疑問があるのではないかなと思います。

とにかくそれを見ると、ベトナムとか韓国では60~70%くらいの支持率があったのに対して、日本は大体40%くらいでした。いちばん面白いのは、中国は8%でした。良いかどうかは全く別ですが、中国はもともとのASEANプラス3とかそういう概念を受け入れたり、それを発展してまた別の方向に行ったりします。どっちにいても、とにかく国内の支持がないと何もできません。そうすると、中国の政府に対してこれは結構大きな挑戦になると思います。要するにこの概念を受け入れるか、利用するか、概念に寄与するかという選択肢になってしまうと思います。中国の場合、メディアが完全に自由であるとはいえないですが、やはりある程度の議論はありますから、民意をそのまま受け入れる状況ではないものの、それを全く無視することも中国の政府にとっては難しいと思います。中国政府は今どういう方向で考えているのでしょうか。

孫 鋭い指摘です。中国のアジア意識は8%あっても、実はどうでもいい8%です。アジア研究は中国でかなりありまして、至るところでアジアセンターがありますが、その多くは韓国の財団がアジア研究をやればお金を出すといった形で作られたものなので、当然こ

のようにして出てきたアジア研究自体は質がよいです。

この問題をどう考えるか。先におっしゃった通り、一つの重要な問題として大国だからというのは本当に大きな要素だと思います。つまり、中国は国が大きいだけでなく国の内部で格差があります。格差の大きい国は、対外的に戦争を起こす可能性が実は相対的に小さいと思います。内部の格差を利用し循環させることにより、矛盾を解決するのです。したがって、第一世界と第三世界が中国に内在されているという意識が中国にはありました。その中で、我々にとって東アジアとは一体何なのかという問題は、緊迫な問題にはならず第二位の問題になるのです。第一位にある国際関係といえば、例えば日中関係はどうやってスムーズにやっていけるかといった具体的な問題になってしまい、一つのカテゴリーとして東アジアを作る緊迫性が今でも全く感じられていないのです。

もう一つは、歴史的な原因もあります。毛沢東時代から 50 年代あたりに発展途上国の間の連合、つまりアジア・アフリカ (AA) という形で、中国は国際的な役割を考えてきました。その視座から見れば、東アジアの中には第一世界の日本と第三世界の中国、第一あるいは第二世界の韓国と第三世界の北朝鮮という形で、冷戦構造の中で切り離してしまっただけで、そう簡単に纏められるわけではありません。そこで、中国にとって東アジアというカテゴリーは長い間に意味を持ちませんでした。だから、今でも第三世界理論をいかにして継承するかという問題は、リアルな問題として中国社会には存在しています。

質問 4 今日の議論は自分の専門とは違う話ですが、非常に面白かったです。最後に東アジアというカテゴリーは、現代的に言うとは非常に経済的な動機や必要性に基づいて出てきたものだという話があったと思いますが、その場合、東アジアの経済的要請には市場としての要請という側面が日中韓には非常に強いと私には思えます。ヨーロッパは市場として形成されてきた所ですが、その他の企業同士で M&A を行ったり、高いレベルの生産工程や研究開発はドイツとかフランスで行ったり、単純な生産工程はイギリスやスペインで行ったり、最近では東ヨーロッパに居を移していくというような形で、生産の局面に関して非常に有機的な構成というか統合を進めていると思います。東アジアの場合、企業レベルで、日本と韓国の企業が買収をしたとか合併をしたとか、中国との間でそういうことがあったとかということはほとんどなく、日本の企業は合併して中国に行くというように、生産の局面で言うと東アジアはほとんど分断しているという印象があります。それ自体が東アジアを経済的なカテゴリーとしてみた場合に、やはり非常に特殊なものにしているのではないかなという気がして、それについて孫先生の考えを聞きたいというのが第一の質問です。

第二は、東アジアで語ることの可能性ということで、三つの例を挙げられましたが、よくよく見ると全て戦後の問題、戦後処理の問題にかかわる話です。100年か150年くらいのタイムスパンで東アジアというのを眺めると、ヨーロッパから移植された近代化などといった何かしらの共通項を見出すなりして、東アジアというカテゴリーが語れるのではないかなと思いました。そのあたりを何かお考えがあれば聞かせていただきたいと思います。

孫 一点目の問題について、私はうまく答えられないかもしれませんが、中国国内の経済の専門家や金融問題の専門家たちは、東アジアは西ヨーロッパに対し基本的に小農経済の地域であるという大きな違いがあると言います。東アジアは農村人口が多い小農経済ですから、近代化されにくく、今現在の経済の一体化の進行はかなり表面的なものだと彼らは見ているようです。

その中でおそらく一番大きな問題は、西ヨーロッパに存在しない、国の規模のギャップから出てくる社会システムのギャップです。例えば、日本は大国として語られてきましたが、日本は大きくはないです。そして今、国民国家を平等に語るという前提の下で、大国・小国の話をするのはかなりの冒険になります。価値判断が常に含まれていますが、事実として中国は強国ではないが大国です。その中から発生した、例えば金融に対する要求や市場や労働力の提供に対する要求といったすべての要求は、おそらく朝鮮半島と日本の要求とは本質的に違います。そこはおそらくこの地域の統合の一番難しいところだと思います。

あともう一つは、共通の貨幣を持っていないという点があります。金融は全てドルで作られているため、どうしても一つの独立した地域として経済的に成り立てません。唯一中国が頑張って、そのうちそれはおそらく挫折するだろうと皆わかっているのですが、中国元を国際的に流通させないという最後のひとつの牙城を守っても、それほど意義を生むような力にはならないと思われます。こういう問題を経済的にどう解釈するかは、残念ながら私の能力を超えた問題です。

二番目の問題として、確かに近代化されたプロセスの中で、この地域には共通した問題があるように見えます。しかし、本当に共通していればこの地域は全て資本主義化されるはずだったと思います。これだけ激しく対立した背景には、近代化のプロセス自体がそもそも違ったのではないかという疑問が私にはあります。それからもう一つ、先ほどの冷戦の問題にも繋がっているのですが、なぜ冷戦の中で結局東側が崩壊したのかというと、西側が非常に優れた社会システムを持っていたからではありません。例えば、民主主義などの制度が優れているという幻想は、最近東側では常に再生産されていますが、そういう社

会システムが決して優れたシステムではないということは 9.11 の後世界的にわかってきました。それにもかかわらず、なぜ東側が崩壊したのでしょうか。

根本的な問題は、近代化に対し東も西も同じ認識を持っていたからだと思います。近代化を取り入れることによって、社会主義のシステムはうまく維持できないという根本的に難しい問題があります。資本主義のシステムは、近代化との相性がよかったかもしれませんが、しかし、それと同時にこの社会システムは近代というプロセスの中に含まれていた危険性を最大化してしまいました。これについて西側から反省が最近出始めましたけれども、まだ行くべきところにはいっていないのではないかと思います。クローバリゼーションにより世界は統一され、それは冷戦期の西側の勝利だという暗黙の約束がどこかにあるように見えます。この点についての根本的な問題は、資源が限られている地球の中でこのような近代というシステムを作ること自体が自殺行為ではないかということです。この問題については、まだうまく議論されていないと思います。特に中国の場合、鄧小平の時代から近代化がいかに素晴らしいものかというイデオロギーがずっと主流になってきて、今それに対する反発が出てきましたが、それほど力が大きくありません。おそらく、近代化を進ませた過程の中で中国が抱えている問題自体は、日本や朝鮮半島が抱えているものとはかなり異質なものだ、というのが見えてきたものの、まだ結論には至っていないのが基本的な事実です。

質問 5 今おっしゃった、近代化と社会主義のシステムは実は両立しないものだった、ということの含意・インプリケーションについてお聞きします。資本主義というのは、人間の物質的欲望を限りなく開花させるシステムであり、それが地球資源の枯渇に導くような運動をどんどん進めていき、社会主義はそれを制約する要素を持っていた。近代化という意味では、社会主義は人間の物質的欲望を限りなく受け入れるような生産システムを発展させるものではなく、人々の物質的欲望に応えることができずにシステムとしては崩壊したけれども、実は理念的には今まさに我々が直面している問題を回避できる何か価値的なものを持っていた、というふうに最後のところでおっしゃったのでしょうか。

孫 少し違います。まず一つは、今の段階では私自身まだ結論を出せない問題ですが、社会主義社会は社会システムとして、具体的な中身はともかくとして存在したことはあります。中国は建国すぐに農民を搾取し、暴力で農村の資源を集中して公営化しまして工業化をすばやく発展しました。これは明らかに近代化の「原始蓄積」というプロセスです。もちろん、このプロセスについていろいろな分析が可能ですが、やらなければ潰されてしま

うという国際情勢の中でやらざるを得なかったという事実は否定できません。

それと同時に、毛沢東時代のイデオロギーは近代化という言葉を使いません。それは近代化という表現では把握できないような近代化ですが、実質的には近代化です。先ほど私は、資本主義を地球の資源を最大限に浪費するシステムだとして単純に総括してしまいましたが、社会主義を理想状態として中国の資源の無駄遣いや格差を防止できるシステムであるとも言いたくありません。とにかく、こっちは理想でこっちは駄目だという視点を私はとりません。

質問 5 わかりました。私もそうです。最初のところでやや挑発的におっしゃった、日本の批判的知識人が日本の戦争責任を論ずる時に、日本を過大評価しているのではないかという点についてお聞きしたいと思います。それ以外の適当な表現を思いつかないので、さしあたりこういうふうにおっしゃったことのインプリケーションです。つまり、東アジアという地域をとりあげてみると、東アジアにいる国々の間の相互関係だけではなく、アメリカのプレゼンスが大きく、アメリカが内在化されている。そういう構図を持った地域としてみることでおっしゃいました。これとかかわって、日本の人々は日本の戦争責任を考える場合にも、東アジア地域におけるアメリカのプレゼンスを内在化あるいは踏まえた上で、日本の戦争責任を語るべきだとおっしゃっているわけですね。

孫 はい。

質問 5 それは戦後の展開だけではなくして、戦前の問題も含めてお考えですか。つまり、日本という帝国主義がアジアを侵略するというところに、カギカッコつきで踏み込まれていく帝国主義的な諸関係も含めて日本の人々は戦争責任の問題を論じるべきであり、日本が中国や朝鮮に対し自分たちが全て悪いことをしましたという謝り方は適切でない、というふうに問題を立てるべきだというふうにおっしゃっていると理解してよろしいですか。

孫 それは危険性を感じますね。

質問 5 そうですね。非常に相対的な議論なので。

孫 戦前と戦後の状況はもちろん違います。戦前の責任を追及する場合、日本が東アジア隣国に正式的に謝罪していないことを考えれば、それに集中して追及することも必要ですが、問題は、この追及自体がすでに戦後の歴史の文脈において発生した行為です。つまり日本政府は謝罪しないということは、戦後の歴史と関わっているわけです。今は非常に二元対立で、戦争責任があるかないかという形で議論が行われ、それだけに集中してしまうと他の歴史的な要素が無視されてしまうという話をしたつもりです。だから、先ほど戦後

の三つの事件を挙げまして、いずれも東アジアという場がなければ論じられないことを強調しました。ただし、それは決して日本の戦争責任を糊塗するわけではありません。

質問5 そのところが私にはよくわからないのです。東京裁判、朝鮮戦争、台湾問題を東アジアという装置によって語ることに、一体今のディスコースとどういう違いが出てくるのでしょうか。どういう新しい言い方が出てくるのでしょうか。

孫 例えば、東京裁判についてそれは正義を代表したかどうか、或いは正しい裁判だったのか正しくない裁判だったのかという議論がずっとあります。当時の歴史状況からみて、東京裁判は中国にとっても非常に複雑なことでした。というのも、東京裁判に送られた中国側の判事たちは、ほとんど無政府状態できたからです。国民党はその時共産党と内戦をやっていたので、東京裁判に一番関心があった訳ではないのです。自主的に何人かを外交部から派遣されたという経緯があります。ですから、東京裁判というのは中国の国民党・共産党との対立関係に直接に繋がっているのです。さらに言えば、今の大陸と台湾の問題にも絡んでくることです。

最も複雑なのは、この東京裁判に出た中国の代表的な弁護士が戦後になって台湾に行かずに北京に残ったということです。彼は北京で最高裁判所を作り、戦後中国の法律の創始者となった人です。この人はハーバード大学、つまりアメリカの教育を受けて帰国した法律学者で、この人は1956年に中国東北の瀋陽でもうひとつの裁判が行われたときに、裁判の法学的条文に関して大きな貢献をしました。1956年の裁判の結果、日本で有名になった中帰連という組織が出来ました。この一連のことを全部含めて一緒にやらないと、東京裁判がただ悪いか良いかという感想の対立に集中してしまい、イデオロギー化されてしまいます。しかし、先ほど言ったような複雑な経緯が全部絡んでいるため、一国からの視点ではおそらくうまくいかないのではないかと思います。

朝鮮戦争も同じです。中国が朝鮮戦争に絡んでいった理由は、ご存知のようにソビエトとの関係にあります。そして、朝鮮戦争によって中国の軍隊はソビエトに武装されました。50年代に朝鮮戦争で出来上がった中国の軍隊のスタイルは、ソビエト式でした。それに反発するために、毛沢東は60年代になってから文革中で軍隊の服装から全てを変えました。そして、それと関連して一連の内部の闘争も実は朝鮮戦争と繋がっていたのです。

朝鮮戦争と東京裁判の間にも、いろいろな細かい繋がりがありませんね。最も大きな繋がりとして、日本を占領しなければ朝鮮戦争をやりにくかったアメリカは、東京裁判で免罪された731部隊の実験結果を朝鮮戦争で使ったということがあります。なので、当時の中

国東北地方には愛国衛生運動という運動がありました。なぜ「愛国」と「衛生」は繋がるかということ、朝鮮戦争でまかれたコレラなどの恐ろしい伝染病の細菌がねずみなどの小動物を通じて中国の東北にも入ってくるため、それは戦争と直接に繋がっているからです。ねずみを殺すことはアメリカ兵を殺すことだなどのスローガンまでも生み出されたものでした。そういう意味において、その愛国衛生運動は、東京裁判で免罪された細菌戦との戦いでもあったのです。こういうことは、日本の責任なのかアメリカの責任なのかという点に集中してしまうとなかなか見えてこないと思います。

質問6 今日の東アジアを語るということを考える時に、私としてはいわゆるASEANプラス3 というもっと広い意味での東アジアをどう語るのか、という問題に関心があります。

ASEANプラス3 という広い意味で東アジアを語られるようになったのには、確かに経済的な意味が大きいと思います。例えば、経済的な意味で東アジアという単語が出てきた背景には、世界銀行が出した『東アジアの奇跡』とい本をそもそも丸呑みしたということがあります。その後アジア経済危機があり、1991年からそれに対する対処としてASEANプラス3 の会議が出てきて、その積み重ねとして東アジア首脳会議ができてきたように、経済的な制度や機構が少しずつ整えられてきたことが非常に大きいと思います。

また、先生の今日のお話をお伺いしていると、ASEANプラス3 という形の広い意味での東アジアを語る時に、先生の枠組みは実はかなり有効なのではないかと考えています。例えば、アメリカの介在の中で東アジアをどのように考えるといいのか。そうすると、歴史を直視する或いはシグナルするものとしての東アジア、一国の内部で処理しきれない問題を扱う視座としての東アジアというのが存在するのではないかと考えています。

先生は今日、いくつかの装置を利用して東アジアを語られましたが、その中でより広い意味の東アジアを語る可能性についてどうお考えでしょうか。

孫 これは、私の弱い部分を非常に鋭く突いた質問です。東アジアという語り方を原理化しないと、おそらく一般的に通用できないと思います。例えば、オリエンタリズムという西洋の人たちが作った言葉がありますが、彼らにとって東洋はひとつのものでした。ヨーロッパにとって、日本、中国、朝鮮半島は同じところで、言葉は通じないが大して変わらないと思われています。

つまり、地域が一つの共同体として成り立つのは外から見た場合に限られるのです。これを原理化するためにどのような要素が必要なのかということは、おそらくご質問の中に

ある根本的な問題だと思います。ただ、アメリカを内在化して冷戦を歴史的に見るというような位相では、おそらく東アジアを原理化できないと思います。また、その地域を拡大することによって原理化できるとも私は思いません。この点については、私が一番迷っているところです。そもそも極東という言葉が西側からきた言葉である以上、今日の東アジアを原理化するためにも西との比較はある意味では必要なのかもしれません。

したがって、この地域が西側に無いようなものを持っているとすれば、それを原理化することは可能なのではないかと私は思います。例えば、今日の話の中で私は国民国家で片付けられないという言い方を何度もしましたが、それはできれば原理化したい問題が含まれているからです。つまり、今日私たちが国民国家やナショナリズムを語る時、ある意味ではヨーロッパや欧米の水準に合わせて語っているのです。だから、ナショナリズム批判自体にも、ある意味で非常に西洋的な部分が含まれています。私は、国民国家やナショナリズムが私たちの歴史に合っていないとは言いません。合っている部分があると思います。ただ、もし原理化できれば、私たちはおそらく自分の歴史を語る時に、違う語り方をする必要があります。そういう発想が私にはあるのですが、うまくいくためにはかなりの戦いをしないとイケません。

もうひとつは、アメリカの内在化や社会主義陣営の崩壊といったプロセスの中に含まれている原理性は何なのかという点です。アメリカが暴力によって侵入したことは、確かにわかりやすい歴史的な事実であり、逆に非常に歓迎されて利用された面もあります。もちろん、直感的な意味で歓迎したのではなく、やむを得ずアメリカに占領された日本には逆にそれを利用するシステムがありました。こういうシステムは、東アジアの中でかなり一般的なものなのかもしれません。しかし、こういう現象は西ヨーロッパ内部にはそれほど存在していないだろうと思います。

中村 最後に、お一人かお二人くらいから質問をとりたいと思いますがいかがでしょうか。

質問7 少し外れてしまうかもしれませんが、私は次のようなことを根本的な問題だと思っています。つまり、日本人にとって、中国が戦争つまり侵略戦争をした相手であるということと、中国の鄧小平以来の改革開放の経済成長は、非常に強烈に意識せざるを得ないということです。

ところが、中国も同じなのではないかと私は感じてきています。25年間くらい学術交流している自分と同じ70代の中国人の知人が何人かいますが、彼らの考えに愕然としたことがあります。というのは、彼らは日本の侵略戦争と経済成長の二つだけしか見えていない

のです。つまり、戦争と経済成長の間に行われた平和と民主主義の思想および運動という日本の戦後改革が、全く欠落しているのではないかと思うのです。

このようなことは、中国人の日本研究や中国社会科学における日本研究に実は問題があるのではないかと思います。つまり、間違いかもしれませんが、日本の戦後がどういうものであったのかということ、事実に基づききちんと中国の中国社会科学院レベルの学者に伝えるという作業が非常に弱いのではないかと思うのです。それについてのご意見を伺いたいと思います。

孫 ご判断は間違っていないと思います。私も全く同感です。私自身も含めて、中国では多くの人たちと協力してこの状況を改善しようとしています。約10年前、私たちはひとつの小さな運動を起しました。名前は的確的ではありませんが、知の共同体という運動を起しました。それまで中国の総合雑誌で中国人と日本人の論文が並んで発表されたことはなく、一緒に戦争責任を論じることはもちろんありませんでした。私たちは運動を起すことで、そういうことをやりました。それをきっかけに、中国の日本学以外の領域で日本に対する関心がある程度呼び起すことができました。しかし、あらゆる運動がそうであるように、知の共同体もただの運動でありそれ以上の役割は果たせません。

ですから、平石先生を初めとして社研の方々に強くお願いしたいことがあります。もちろん社研に限ったことではありませんが、日本にも思想があるというメッセージを中国社会にもっと伝えたいと思います。日本には平和運動がありますよということだけでは、侵略国というイメージを崩すには足りません。国内の問題を解決するための日本人の努力を紹介するだけでは、中国人にとってああ立派だよくやっているというだけで終わってしまいます。自分と関係ないように見えます。でも、日本には思想家がいます、思想がありますよという話になれば自分と関係があるようになります。そして、中国の知の社会において、アメリカ式の学問だけで満足するという状況はもう行き詰まっています。日本を含め、アジアの思想資源を求め始めるようになりました。ですから、戦略的な考えなのかもしれませんが、日中関係を改善するための一番の近道は、日本の思想家の存在が中国に伝わることだと思います。もちろんほかのことも必要ですが、日本学が弱いということは確かです。このような理由から、皆様にぜひともお願いしたいと思います。

中村 どうもありがとうございました。予定の時間を若干超過いたしました。思想を語り始めますと長くなりまだ足りないくらいですが、とりあえずここで終わりということにいたしたいと思います。本日は本当にどうもありがとうございました。 (終了)

東アジアを語ること、その問題点と可能性

孫 歌

一、議論の前提

1、東アジアは、どの地域を指しているか

日本、韓国、北朝鮮、中国大陸、台湾

ソ連（ロシア）、モーグル共和国、中国、朝鮮半島、日本、ベトナム

地域の違いによって、語るパターンが峻別され、発想法や視座の相違が示されている。

2、東アジアは、どのような歴史の文脈に置かれているか

儒教文化圏、西洋に学びかつ対抗する地域共同体

大東亜共栄圏という痛ましい記憶

社会主義革命の地域、冷戦期の国際政治関係の変動の場

3、東アジアは、自足できる地域なのか

開かれなければならない東アジア：アメリカの存在

アメリカを「内在化」させ、自ら利用する東アジア各国の緊張関係

二、東アジアの問題性

1、冷戦の実像に迫ることで、東アジアの構成単位を検討する

国単位の発想自体の不十分さ：朝鮮半島の分断問題、中国における台湾の分離主義などは、いずれも「民族国家」という単位に収まらない問題として、「東アジア」という地域の歴史に織り入れられた。その上、アメリカが東アジアに内在化するプロセスは、さらに国単位の発想を超えている。それを十分に認識するために、「東アジア」という空間が不可欠であるが、この空間の性質はいまだに曖昧なまま。

2、「極東の諸問題」から得た示唆

東アジアの構造を、冷戦構造の「不安定性」とのつながりで考えては？

「冷戦」というキーワードを歴史化すれば

3、激しく変動してきた「東アジア」の歴史をどのように処理すべきか

今日の日本、朝鮮半島（実は韓国が中心となっている）、中国（台湾との関係が無視されがち）に集中する「東アジア像」から、何がこぼれ落ちたか

三、東アジアを語ることの可能性

1、歴史を直視する場としての東アジア

国単位で避け続けた問題を直視するための装置

歴史の変動を直視するための装置

2、一国内部で処理できない問題を扱う視座としての東アジア

東京裁判、朝鮮戦争、台湾問題

3、国際関係という視座との相違点

「国の間」に止まらない問題

流動的歴史における「東アジア」というカテゴリーの相対的な独立性